

臥薪嘗胆

秋田県病院薬剤師会会長
能代厚生医療センター薬剤科薬剤長
平泉 達哉 Tatsuya HIRAIZUMI



「臥薪嘗胆ここに1年…♪」

私の母校である創立127年の高校には、長い歴史のなかで世代から世代へと歌い継がれてきた二十曲以上にも及ぶ応援歌があります。その一節にこの言葉があり、巻頭言を執筆するにあたり、今年一年を振り返るなかでふと頭を過りました。青春の記憶に刻まれたこの歌は、目標達成のために苦難をしのぎ、努力を重ねる姿勢を象徴しており、いま秋田県病院薬剤師会が取り組む薬剤師確保対策の歩みと重なるものを感じます。

秋田県は全国で最も高齢化が進んでおり、2025年には高齢化率が40%を超えました。医療・介護の需要は年々増大し、病院薬剤師が担う業務もますます多様化・高度化しています。医薬品の適正使用管理、服薬指導、副作用モニタリング、抗がん剤や注射薬の無菌調製、薬剤師外来、医師への処方提案、医薬品情報提供など、薬物療法の根幹を支える役割は、チーム医療のなかで一層重要になっています。しかしながら、秋田県の病院薬剤師不足は深刻です。偏在指標は0.56で全国46位、県内でも県北部0.53、県中央部0.62、県南部0.44と地域偏在が顕著です。令和6年4月に施行された「秋田県医療保健福祉計画」では、病院薬剤師の確保を重点課題として掲げ、5年以内に123.7名の確保を目標としています。しかし、これまで薬剤師確保のための県予算は計上されておらず、抜本的な対策には至っていません。

東北では秋田県と山形県に薬学部がなく、秋田県出身の薬学生数は近年30～40数名程度と東北で最少です。従って、まずは県出身の薬学生を増やし、将来、秋田県内で病院薬剤師として活躍してもらうための施策が急務です。加えて、体系的なキャリア形成プログラムに基づく人材育成や、薬剤師が不足する病院への出向支援も必要です。秋田県病院薬剤師会では、2023年より県医務薬事課医療人材対策室および県薬剤師会と連携し、協議を重ねてきました。2024年度からは「薬剤師確保対策委員会」を設置し、オンラインによる高校生・薬学生向け懇談会、県内病院薬剤師部見学サポートなど、独自の取り組みを展開していますが、依然として進展は十分ではありません。

このような現状を打開すべく、今年10月に県薬剤師会と連名で「秋田県における病院薬剤師確保に関する要望書」を作成し、秋田県知事に直接手渡しました。要望の主な内容は、①県独自の病院薬剤師修学資金貸付制度の創設、②不足地域への出向支援体制の整備、③小・中・高校生を対象とした啓発事業の推進、④就職サイトの充実、⑤復職・研修支援の充実の5項目です。知事からは「対策を前向きに検討する」とのコメントをいただき、一歩前進した感があり、今後の進展に期待がもてます。まさに苦難をしのぎ、努力を重ねる姿勢の大切さを実感しました。

秋田県は高齢化率で全国（延いては世界）をリードしていますが、裏を返せば、高齢者医療の提供体制において最先端のモデルを構築する可能性を秘めています。病院薬剤師の確保を着実に進め、安心・安全で効果的な薬物療法を実践することにより、秋田から世界へエビデンスを発信できる日を信じて、これからも地域医療の発展に向け「臥薪嘗胆」の精神で歩みを進める所存です。